

第23回 関西アルコール関連問題学会 滋賀大会 プログラム

わたしがつなぐ支援の輪

【開催日】平成28年11月26日（土）
平成28年11月27日（日）

【会場】

コラボしが21 〒520-0806 大津市打出浜2番1号
大津勤労福祉センター 〒520-0806 大津市打出浜1番6号

【主催】関西アルコール関連問題学会

【後援】（予定）

滋賀県 大津市 滋賀県医師会 大津市医師会 日本精神科病院協会滋賀県支部
滋賀県精神神経科医会 滋賀県精神科診療所協会
滋賀県精神保健福祉協会 滋賀県看護協会 日本精神科看護協会滋賀県支部
滋賀県精神保健福祉士会 滋賀県臨床心理士会 滋賀県作業療法士会
滋賀県社会福祉士会 滋賀県ホームヘルパー協議会
滋賀県介護支援専門員連絡協議会 滋賀県介護福祉士会 滋賀県薬剤師会
滋賀県家庭相談員連絡協議会 滋賀県医療ソーシャルワーカー協会
日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会関西支部
関西アルコール看護研究会

第23回関西アルコール関連問題学会滋賀大会 事務局
滋賀県立精神医療センター
〒525-0072 滋賀県草津市笠山八丁目4番25号
TEL)077-567-5001 FAX)077-567-5033

第 23 回関西アルコール関連問題学会開催にあたって

滋賀大会長 大井 健

滋賀県立精神医療センター 病院長

関西アルコール関連問題学会に参加される皆様を心から歓迎いたします。また会員各位の協力のもと、滋賀の地で開催できることを感謝申し上げます。

さて、本大会の話題の中心は、平成 26 年に策定されましたアルコール健康障害対策基本法に基づき、本年 5 月に政府から発表されたアルコール健康障害対策推進基本計画であろうと存じます。アルコールが飲酒者個人の心身への影響のみならず、飲酒運転、暴力、虐待、自殺等の社会問題に関連することを明記し、それらへの対策を示しています。取り組むべき重点課題の 1 番に、未成年、妊産婦、若い世代に対する健康障害発生予防を謳っていることは特徴的です。シンポジウムあるいは記念講演等で理解を深め、今後の各地域の基本計画策定の一助となれば幸いです。

ところで、薬物依存ならびに薬物乱用者対策として、本年 6 月に刑法等の一部を改正する法律が施行されましたが、一部執行猶予と薬物乱用者に対する専門的処遇の強化をめざす制度について分科会を設けました。一方、向精神薬など治療の場で処方される医薬品についての乱用・依存についての分科会もあります。また、従来のアルコール・薬物等の物質依存とは別に、近年若年者を中心に社会問題化しているギャンブル依存あるいはネット依存等の行為嗜癖（依存）についても講座を開催します。

滋賀大会は、「わたしが つなぐ支援の輪」をテーマとしました。皆さんが主人公です。

各人が主体となって支援の輪を強く結んでいこうという気持ちを込めました。ますます複雑・多様化する依存の問題に対して、力を合わせて取り組む機会になることを祈念しています。

なお、晩秋の滋賀には、紅葉のスポットが数多くあります。開催地の大津市には比叡山、石山寺、日吉大社などがあり、ひとときの息抜きに訪れてみてはいかがでしょうか。

第23回 関西アルコール関連問題学会滋賀大会 スケジュール

平成28年11月26日(土)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

●会場：コラボしが21

- 9:30～ 受付
9:45～ 開会式
10:00～12:30 基礎講座『これからのアディクション問題について考えよう』
分科会1『薬物関連障害の治療と回復支援』
分科会2『滋賀県のアルコール医療ネットワークを考える』
分科会3『アルコール依存症家族への支援を考える』
13:30～16:00 専門講座『ギャンブル依存、インターネット依存について』
分科会4『アルコール問題を抱える高齢者の支援』
分科会5『アディクションフォーラム in 滋賀』
分科会6『就労支援での実情を振り返る』
分科会7『一般医療機関との連携』
ワークショップ①
『誰でもできる!明日からできる!やってみよう節酒指導!』
～ブリーフ・インターベンションを学ぶワークショップ～

●会場：大津市勤労福祉センター

- 10:00～16:00 ワークショップ②『明日から使える動機づけ面接法』
10:00～17:30 ポスターセッション (16:30～質疑応答)

●懇親会：18:30～20:30 (滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール「レストランオペラ」)

平成28年11月27日(日)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

●会場：コラボしが21

- 9:00～ 受付
9:30～12:00 シンポジウム『国の基本計画から地域の推進計画を』
分科会8『女性の回復と自助グループ』
分科会9『処方薬依存について考える』
12:15～13:15 ランチョンセミナー
『アルコール依存症に併存する精神科的併存症や発達症』
13:30～16:00 記念講演『生き延びるための依存症、生き直すための回復』
分科会10『災害とアルコール問題』

16:00～16:30 閉会式

●会場：大津市勤労福祉センター

- 9:30～15:30 ワークショップ③『CRAFTワークショップ』

会場へのアクセス

● コラボしが 21

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 2 番 1 号

● 大津市勤労福祉センター

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 1 番 6 号



交通機関のご案内

JR 琵琶湖線 (JR 東海道本線) 「大津」 駅よりバス約 7 分、または徒歩約 20 分

JR 琵琶湖線 (JR 東海道本線) 「膳所」 駅より徒歩約 15 分

京阪電鉄「石場」 駅より徒歩約 3 分

名神高速大津 IC よりお車で約 5 分

○JR 大津駅→バス→びわ湖ホール

[なぎさ公園線 のりば 2 番] 近江鉄道バス・京阪バス共同運行 (大津プリンスホテル行)

バス停：びわ湖ホール下車 所要時間約 7 分 運賃 210 円

(大津駅発 8:15 ~ 17:55 までの運行)

○JR 大津駅→バス→商工会議所前

[湖岸線 のりば 2 番] 近江鉄道バス (近江大橋経由 草津駅西口行)

京阪バス (湖岸経由 石山駅行)

バス停：商工会議所前下車 所要時間約 7 分 運賃 210 円

●基礎講座 11月26日(土) 10:00~12:30

『これからのアディクション問題について考えよう』

ここ数年、アルコール健康障害対策基本法の施行、薬物依存症等に対する刑の一部執行猶予制度の導入など、物質依存症への対応が大きく変わりつつあります。また、ギャンブルやインターネットなど物質以外への依存も大きな社会問題となっています。

今回はこれらを広くアディクションの問題としてとらえ、その診断、治療、関わり方など、援助者として知っておきたい基本的なことを学んでゆきたいと思います。

【司 会】 濱川 浩 (滋賀県立精神医療センター 医師)
【講 師】 柴崎 守和 (滋賀県立精神医療センター 医師)
藤井 望夢 (藤井クリニック 精神保健福祉士)

●専門講座 11月26日(土) 13:30~16:00

『ギャンブル依存、インターネット依存について』

～どんな病気？どこからが病気？～

ギャンブル依存、インターネット依存とは、どのような病気かご存知でしょうか。

近年、アルコール・薬物依存といった物質依存だけでなく、ギャンブル依存やインターネット依存といった行為依存が社会問題としてマスメディアでも取り上げられるようになりました。

物質依存と比べて行為依存は、多重債務や失職、ひきこもり等の別の問題が表面化した時に、家族等の周囲がその問題に気付き、周囲がその解決のための対応に追われ疲弊していく傾向があります。また、行為依存の背景に躁鬱病や発達障害といった精神疾患がある場合や、実生活において人間関係上や経済上深刻な問題を抱えている場合も少なくありません。

この専門講座では、ギャンブル依存とインターネット依存に焦点をあてて、病気の特徴を知り、問題を抱える本人や家族への理解を深め、相談支援などの対応に役立てていくことを目的とします。

【司 会】 佐藤 周 (滋賀県立精神医療センター 精神保健福祉士)
【講 師】 <ギャンブル依存>
滝口 直子 氏 (大谷大学文学部社会学科 教授)
<インターネット依存>
片上 素久 氏 (大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学 講師)

●ワークショップ①・・・・・・・・・・・・・・・・ 11月26日(土)13:30~16:00

『誰でもできる！ 明日からできる！ やってみよう節酒指導！』
～ブリーフ・インターベンションを学ぶワークショップ～

近年、アルコール依存症予備軍に対するブリーフ・インターベンションが注目されるようになりました。ブリーフ・インターベンション (Brief Intervention) とは、短時間で簡単に行うことのできる行動カウンセリングで、多量飲酒者の飲酒量を減らすことができます。その効果はすでに実証済みで、平成25年度から、特定健診・特定保健指導プログラムにも取り入れられました。また、今年度国が策定した「アルコール健康障害対策推進基本計画」の中でも、アルコール健康障害を予防するための早期介入の手法として記載され、保健・医療分野での普及が待ち望まれています。このワークショップでは、誰でも簡単に、明日から実施できるように、関西アルコール関連問題学会が作成したワークブック「あなたの飲酒大丈夫ですか？」を使用教材として、ブリーフ・インターベンションの技法を学びます。地域の保健・医療の第一線で活躍中の保健師や栄養士など、コメディカルの方々のご参加をお待ちしております。

- 《定員》 50名 (事前申込みで先着順、当日参加は定員に空きがあるときのみ)
*参加者にはワークブック「あなたの飲酒大丈夫ですか？」5冊プレゼント
《参加費》 学会参加費の他に、追加料金として1000円が必要となります。



【司 会】岸田 寿一

(和歌浦病院 精神保健福祉士)

【講 師】和気 浩三 (新生会病院 医師)

略歴：平成5年近畿大学医学部卒業

平成12年より新生会病院に勤務し、

アルコール医療に従事する

平成19年より同院 院長

役職：日本アルコール関連問題学会 理事

関西アルコール関連問題学会 事務局長

大阪府断酒会 顧問

●ワークショップ② 11月26日(土) 10:00~16:00

『明日から使える動機づけ面接法』

相手を変えようとすればするほど、抵抗や否認の壁にぶつかって関係が膠着してしまう。これは、アルコール依存症の臨床にかぎらず、ほとんどの支援者が体験し、悩んできたところ。

人が変わってゆく過程を援助する技法として、注目されている「動機づけ面接法」は、問題飲酒へのアプローチから生まれ、「直面化」中心だった依存症の治療に革命をもたらしたとも言われています。いまや依存症治療だけでなく、精神科領域全般、内科領域での高血圧・糖尿病などの生活指導、虐待など福祉領域の困難事例への介入、さらに一般企業における教育など様々な領域で使用され、医療や福祉に従事する人にとっては、基本かつ必修の技法となっています。

ミラーとロールニクスの著書「動機づけ面接法」「動機づけ面接法実践入門」(いずれも星和書店)の翻訳者の一人である後藤恵先生をお招きして、毎年大好評のワークショップを開催します。実践的なロールプレイで、楽しく学びましょう。

《定員》100名 (事前申込みで先着順、当日参加は定員に空きがあるときのみ)

《参加費》学会参加費の他に、追加料金として1000円が必要となります。

【司 会】 奥田 由子 (守山こころのクリニック・大津市保健所 臨床心理士)

【講 師】 後藤 恵 (成増厚生病院 医師)

【講師略歴】

1985年京都府立医科大学卒業。1991~1994年、ロンドン大学精神医学研究所にて、嗜癮行動科学専門医コースを修了し、そのほか家族療法・認知行動療法・地域医療・児童精神医療などを学ぶ。1994年高月病院アルコール病棟勤務。1996年東京足立病院アルコール病棟等勤務。1999年より成増厚生病院急性期治療病棟・アルコール病棟勤務、2003年診療部長。2014年都立松沢病院依存症外来を兼務。翠会ヘルスケアグループ精神医学研究所副所長。日本アルコール精神医学会評議員。

●分科会1 11月26日(土) 10:00~12:30

『薬物関連障害の治療と回復支援』

覚醒剤を中心とする違法薬物の乱用に対して「処罰よりも治療によって対処すべき」とする意見が受け入れられつつあり、薬物関連患者が依存症治療の場に現れる機会が多くなっている。「薬物関連障害にどう取り組んだらいいのだろう」という戸惑いに答えていただくために、この間、積極的に取り組んできた施設や機関から現状をお話しいただき、視点を共有し連携を深める場としたい。

- 【司 会】 麻生 克郎 (垂水病院 医師)
- 【話題提供】 倉橋 桃子 (大阪府立精神医療センター 精神保健福祉士)
- 畠中 陽子 (ひがし布施クリニック 精神保健福祉士)
- 廣兼 元太 (広兼医院 医師)
- 井之口 隆 (大阪保護観察所 主席保護観察官)
- 加藤 武士 (木津川ダルク 施設長)

●分科会2 11月26日(土) 10:00~12:30

『滋賀県のアルコール医療ネットワークを考える』

滋賀県では、アルコール依存症の治療を行うために入院できる専門医療機関が2機関しかない。反面、断酒会等の自助グループの活動が盛んであり、各地域に存在している。退院後の断酒継続のためには、地域の自助グループやアルコール専門医療機関以外の病院とも連携していかなければいけない。

この分科会では、今後の滋賀県のアルコール医療ネットワークの構築に向けて、話題提供者だけでなく、参加者と一緒に考えていく機会としていきたいと思います。

- 【司 会】 小西 亮 (滋賀県立精神医療センター 精神保健福祉士)
- 【話題提供】 安田 浩二 (滋賀県立精神医療センター 看護師)
- 谷本 真衣子 (琵琶湖病院 精神保健福祉士)
- 池田 周二 (長浜赤十字病院 精神保健福祉士)
- 未 定 (滋賀県断酒同友会)
- 【指定発言】 植松 直道 (植松クリニック 医師)

●分科会 5 11月26日(土) 13:30～16:00

『アディクションフォーラム in 滋賀』

アディクションフォーラム in 滋賀が始まるきっかけは、ある一人の女性の一言からでした。「滋賀県には色々な自助グループがあるけど、みんなで集まって何かをしたい。」

その言葉をきっかけに 2008 年から県内の様々な自助グループが集まり、アルコール、薬物、ギャンブルなどの依存症で悩む当事者、家族に向けて、自らの体験を語ることで、一人でも多くの方が、生きることが楽になるようにと、毎年フォーラムを重ねてきました。

今回の分科会では、アディクションフォーラム in 滋賀のこれまでの歩みを紹介するとともに、参加者の皆様にもアディクションフォーラム in 滋賀 実行委員会のメンバーの体験談を聞いていただきたいと思います。

【司 会】 小西 亮 (滋賀県立精神医療センター 精神保健福祉士)

【話題提供】 アディクションフォーラム in 滋賀 実行委員会メンバー

●分科会 6 11月26日(土) 13:30～16:00

『就労支援での実情を振り返る』

～ 支援の中での気づき、これからの課題、そして実践へ ～

アルコール等依存症の方々は回復を続け、自立を進めていく中で様々な問題にぶつかる。特に、治療や回復のことを一番に考えることができていた病院や作業所から就労へと進んでいく際にクリアしていかなければならない課題が多数ある。

アルコールによって体を壊して仕事を離れていた人にとっての久しぶりの職場復帰では、体力はあるのか。朝からアルコールが入り仕事に行けていなくなっていった人は、きちんと毎日通うことができるのか。若い頃からアルコール中心の生活でまともに仕事に就いたことがなかった人やお酒とセットでしか仕事をしたことがない人は、素面の状態で“仕事”に取り組むことが出来るのか。仕事をする時に、自助グループに行ったり病院に定期的に通ったりする時間を休みの中に確保することができるのか。など。

このように、お酒をやめていくことの上で就労するにあたって考えるべきことはたくさんある。病院、地域の作業所、それぞれの立場から上記の問題に対してどのように対応して就労支援を行っているのか、お話を伺いたいと思う。

そして、人によっては一般就労を目指すだけが道ではなく、社会や地域とつながっての福祉的就労をしながらの回復もありうる。その場合にはどのような支援を行っていったらいいのか、当事者は何を思っているのか、アンケートを基に考えていきたい。

また、就労支援事業は総合支援法に基づいての支援だが普段の支援の中では目の前のこ

とに一杯になり、改めて学ぶ機会のなかなか持てていないことも多い総合支援法が、どのような理念に基づいて制定された法律であるのか、また実際の就労支援にどう活かせるのか、お話を伺いたい。話題提供者の話を元に皆さんで振り返りを行い、課題を整理して実践に結び付けていきたいと思う。

【司 会】 市村 健二 (リカバリハウスいちご ソーシャルワーカー)

【話題提供】 坂本 満 (新阿武山病院 精神保健福祉士)

田島巳喜雄 (大阪マック 施設長)

松村 文香 (リカバリハウスいちご 精神保健福祉士)

佐古 恵利子 (リカバリハウスいちご 精神保健福祉士)

●分科会7 11月26日(土) 13:30~16:00

「一般医療機関との連携」

アルコール健康障害対策基本法の基本計画が国により策定され、次いで、各都道府県が基本計画の策定に向けて動き出している。国の基本計画の中には、取り組むべき施策の一つとして、『地域において、内科や救急など、アルコール健康障害を有している者が受診していることが多いと考えられる一般医療機関と、専門医療機関との連携を促進する』と明記されている。

「一般医療機関との連携」は、法律施行以前より何度も当学会で取り上げられてきたテーマである。しかし、連携を強く実感するには至っていないのが現状であり、地道な取り組みを継続する必要がある。そこで当分科会では、継続した取り組みの一例として、平成20年度より活動している「四日市アルコールと健康を考えるネットワーク」の取り組みをご報告いただく。そして後半に、滋賀の一般医療機関と専門医療機関との連携について、各立場より取り組みをご報告いただき、さらに連携を深める場としたい。

【司 会】 山田 孟志 (滋賀県立精神医療センター 精神保健福祉士)

山本 哲也 (小谷クリニック 医療福祉相談室 精神保健福祉士)

【話題提供】

吉川 晴子 (市立四日市病院 地域連携・医療相談センター サルビア
副所長 医療ソーシャルワーカー)

山本 哲也 (小谷クリニック 医療福祉相談室 精神保健福祉士)

山田 孟志 (滋賀県立精神医療センター 精神保健福祉士)

有村 祐亮 (滋賀県東近江健康福祉事務所 保健師)

北門 慎史 (訪問看護ステーション デューン 京滋エリア部長)

●シンポジウム 11月27日(日) 9:30~12:00

『国の基本計画から地域の推進計画を』

本年5月31日に国の基本計画が閣議決定されました。これからは国の基本計画だけでなく都道府県、政令指定都市での推進計画を策定することが重要になってきます。しかし、地域によっては必ずしも力が入れているとは思えない状況です。鳥取県では国に先駆けてある健康障がい特化した取り組みがなされ、関係者会議を持ち、相談支援センターを作り、切れ目のない施策のために、28年度の当初予算で1458万6千円が計上されています。鳥取県の取り組みから関西でどう取り組むべきか、議論したいと思います。

- 【司 会】 辻本 士郎 (ひがし布施クリニック 医師)
辻本 哲士 (滋賀県立精神保健福祉センター長 医師)
- 【基調講演】 猪野 亜郎 (かすみがうらクリニック 医師)
- 【シンポジスト】 網師本 教正 (鳥取県福祉保健部障がい福祉課係長 行政職)
平井 昭代 (滋賀県健康医療福祉部障害福祉課 保健師)
遠藤 晃治 (堺市こころの健康センター医長 医師)
新井 和彦 (奈良県断酒連合会会長 当事者)

●記念講演 11月27日(日) 13:30~16:00

『生き延びるための依存症、生き直すための回復』～講演と当事者の語り～

【当事者の語り(体験談)】 池畑 寿江 (兵庫県 東播断酒会)

薬物依存症回復施設「びわこダルク」入所メンバー

【講演】 松本 俊彦 (医師 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部长)

依存症は快楽に溺れた結果ではなく、独力で苦痛をコントロールしようとした結果であり、依存症者にとって、アルコールや薬物は少なくとも一時期は「心の松葉杖」として機能していた。そして、依存症の本質は、「安心して人に依存できない」点にある。今回の講演では、Khantzian の「自己治療仮説」を援用しながら、人がなぜ依存症になり、そしてそこから回復することができるのかについて論じてみたい。

【講師略歴】 神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学附属病院精神科などを経て、現在は独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 薬物依存研究部部长。薬物依存の治療プログラム SMARPP の開発と普及、中高生の自傷行為の調査、心理学的剖検による自殺の実態解明に関する研究などを先駆的にを行い、依存症と自殺予防の分野で広く社会に向けての啓発活動も行っている。訳書に「人はなぜ依存症になるのか 自己治療としてのアディクション」(星和書店 2013) ほか多数。著書に「薬物依存とアディクション精神医学」(金剛出版 2012)、「アルコールとうつ、自殺一死のトライアングルを防ぐために」(岩波書店 2014)、「自分を傷つけずにいられない—自傷～回復するためのヒント」(講談社 2015) ほか多数。

●ワークショップ③ 11月27日（日）9:30～15:30

『CRAFTワークショップ』－困っている家族に必要なスキルを提供できるプログラム

【講師】 吉田 精次 医師（藍里病院 副院長）

受診に抵抗する患者のことで相談に来た家族に対して「患者が診察に来なければどうしようもない」ではなく「どうやったら患者が診察に来るか、一緒に考えましょう。成功率の高い方法があります」と言える支援こそ求められている。

CRAFT ; Community Reinforcement And Family Training（コミュニティ強化と家族トレーニング）は米国でメイヤーズらによって開発され、カナダではギャンブル依存症の家族にも応用され、わが国ではひきこもりの家族支援として厚労省のガイドラインにも提示されている。エビデンスも蓄積されており、患者の治療導入率比較研究では、家族に自助グループへの参加を勧めるやり方の成功率が約 10%、古典的な直面化技法である Johnson モデルの成功率が約 30%であるのに比べ、CRAFT の成功率は 64%を越えている。当院での成績も物質使用障害のケースではほぼ同じである。

患者が治療に結びつきやすくなることもさることながら、そうならなかったとしても家族自身がこれまでの行き詰まった考え方や生き方を再検討する機会となり、家族自身のメンタルケアにも極めて有効なプログラムである。CRAFT では家族こそがアルコール問題に対して最も強い影響力を持っていると考え、これまで家族がやってきたがうまくいかなかった対応の仕方に代わる方法を提示していく。小言、懇願、脅し、説教の代わりに患者と家族の肯定的なコミュニケーションを目指し、患者のストレスを軽減させることによって患者の行動に変化を与える技法である。アルコール問題に限らず、治療に抵抗する患者へのアプローチとして活用できる。本ワークショップ参加者がそれぞれの現場で CRAFT プログラムを活用できるように、情報と技術を提供したい。

《定員》60名（事前申込みで先着順、当日参加は定員に空きがあるときのみ）

《参加費》学会参加費の他に、追加料金として1,000円が必要となります。

【講師略歴】1981年、徳島大学医学部卒。2001年からアルコール依存症治療を開始。刑務所における薬物離脱教育を6年間担当。2007年からギャンブル依存症の治療も開始。現在は依存症全般を専門として治療にあたっている。依存症家族勉強会を10年前から院内で月2回開催。依存症問題に悩む家族のための強力な援助プログラムであるCRAFTを全国的に広める活動を行っている。アルコール問題の一次予防活動として小学校6年生から高校生を対象に、ダルクのメンバーと共に「アルコール・ドラッグ乱用防止教育」の出前授業も行い、自殺予防活動として研究会を地域で開催。

藍里病院副院長、徳島県断酒会・顧問、日本アルコール関連問題学会・評議員、徳島アルコール関連問題研究会・代表、徳島ギャンブル問題を考える会・世話人、徳島自殺予防面接技法研究会・世話人、徳島ダルク後援会・代表

著書；「CRAFT 依存症者家族のための対応ハンドブック」（監訳/金剛出版）

「CRAFT 薬物・アルコール依存症からの脱出－あなたの家族を治療につなげるために－」（金剛出版）

「アルコール・薬物・ギャンブルで悩む家族のための7つの対処法－CRAFT－」（ASK）

●ランチョンセミナー 共催：日本新薬

11月27日（日）12:15～13:15

「アルコール依存症に併存する精神科的併存症や発達症」

【司会】 和気浩三（新生会病院 医師）

治療施設を訪れる物質乱用者における精神科的併存症の割合は、35～60%とされている。我が国での状況を調べるために、2012年に我々は全国13か所の入院治療施設の約200人に対して精神科的併存症の有無などについての実態調査を行った。入院したアルコール依存症患者の43.2%に精神科的併存症が認められた。その内訳としては、開放病棟の入院ではうつ病の併存が、閉鎖病棟の入院では双極性障害の併存が最多であった。また、精神科的併存症を有する群と有しない群との比較では、生活歴といった背景に差はないものの、MINIの自殺のスコアと機能不全家族スコア（DFスコア）では有意差が認められた。

近年、発達症の概念が注目されている。中でも物質使用障害者の注意欠如多動症（ADHD）の併存率は約12%で、一般人口の罹患率の3.4%より高いと言われている。このデータの予備的な検証として、我々は2015年下半期に当院に入院したアルコール依存症患者におけるADHDの併存状況を調べた。結果併存率は29.3%と高率であった。さらに、このADHDの併存群と非併存群での臨床的な差異なども紹介する。欧米の教科書では、物質使用障害と精神科的併存症の併存が認められる患者に対してそれぞれの専門家が治療を行うことが望ましいと記されている。ただし、日本の現状では同一の治療者が治療をしている場合が多い。よって、今回は物質使用障害と精神科的併存症や発達症併存群の合併の際の治療に関する経験も述べる予定である。

【講師】 田中増郎（医療法人社団信和会 高嶺病院 精神科 医長）

【講師略歴】2001年 山口大学医学部医学科卒業。同年山口大学大学院医学研究科高次神経科学講座に入学。2003年より高嶺病院に勤務。2008年から慈圭病院勤務。2011年より高嶺病院に勤務し、2012年同院医長。現在に至る。

【所属学会】日本精神神経学会、日本若手精神科医の会、日本アルコール関連問題学会、日本アルコールアディクション医学会、アジア環太平洋アルコールおよびアディクション学会、国際生物医学的アルコール医学会（ISBRA）、こころのバリアフリー研究会

【受賞歴】2009年 第1回アジア環太平洋アルコールアディクション学会ポスター賞、2010年 日本精神神経学会若手発表奨励賞、2012年 第9回環太平洋精神医学会 若手トラベルアワード、2013年 第15回世界嗜癖医学会優秀アブストラクト

●分科会8 11月27日(日) 10:00~12:30

『女性の回復と自助グループ ～アメシストのリーダーたち、本音でトーク～』

医療機関を受診するアルコール依存症患者の約25%が女性となり、「女のくせに…」という偏見も減少したとはいえ、まだまだ女性は少数派である。自助グループでも、AAではメンバーの約33%が女性であるが、断酒会では8~9%しかいないため、断酒会では「アメシスト」と呼ばれる女性メンバーが、セクシュアルハラスメント問題も含め、女性の参加しやすい自助グループのあり方を模索している。

滋賀県では、全国に先駆け、断酒会に4人の女性リーダーが誕生した。兵庫県断酒連合会の女性事務局長にも加わっていただき、本音トークで語り合う機会を持ちたい。

【司 会】 奥田 由子 (守山こころのクリニック・大津市保健所 臨床心理士)
西田 典子 (高島市民病院 臨床心理士)

【話題提供】 「女性の回復と自助グループ」: 奥田 由子
「セクシュアル・ハラスメント防止の取り組み」: 池畑 寿江
(兵庫県断酒連合会 事務局長)

「女性の回復と自助グループ ～本音でトーク～」:
北見 敏子 (滋賀県断酒同友会 彦根支部長)
杉本 佐智子 (滋賀県断酒同友会 信楽支部長)
林 代士子 (滋賀県断酒同友会 大津支部長)

●分科会9 11月27日(日) 10:00~12:30

『処方薬 (特にベンゾジアゼピン系薬剤) 依存について考える』

処方薬依存の問題は、まず過量服薬や自殺未遂に関連して話題になりました。

国の調査でも、処方薬依存で治療を受ける患者数が増加する傾向にあるようです。

このようなことから、少しずつ精神科診療の場面でも注目され、ベグタミンが発売休止になるなどの動きもあります。一方で、ベンゾジアゼピン系の薬剤をネットで販売したり、その薬を医療関係者が提供しているという事件もありました。

今回の分科会では、①処方薬依存に関する文献や診断の考え方の整理、②京都で処方薬依存に対応されている医療機関の実践的な話——この2つを軸にして、処方薬 依存について考えてみたいと思います。

【司 会】 波床 将材 (京都市こころの健康増進センター 医師)

【話題提供】 奥井 滋彦 (おくい診療所 医師)
広兼 元太 (広兼医院 医師)
鶴身 孝介 (京都大学 医師)

●分科会 10 11月27日(日) 13:30~16:00

『災害とアルコール問題』

「災害は忘れた頃にやってくる」と寺田寅彦は言いましたが、2011年3月11日に未曾有の被害をもたらした東日本大震災が発災し、その5年後の2016年4月14日、熊本地震が発災しました。杞憂であればいいのですが、大地震発災のサイクルが短くなっている感じがしてなりません。

さらに、東日本大震災では、想定外とされる福島第一原発事故が起き、熊本地震ではM6.2の前震後にM7本震があり、余震がいつまでも続くというこれもまた想定外のことが起きています。M9クラスの南海トラフ地震が30年以内に70%の確率で発災し、33万人の死者が想定されており、あらためて、自然の脅威を感じるとともに、これまでの経験の蓄積により今後の災害に備えることが必要となっております。当分科会では、東日本大震災、熊本地震の経験から多くの学びを得たいと考えております。

- 【司 会】 野田 哲朗 (兵庫教育大学 医師)
 武輪 真吾 (リカバリハウスいちご尼崎 精神保健福祉士)
- 【話題提供】 松下 幸生 (久里浜医療センター 医師)
 丸田 芳裕 (岩沢神経科クリニック/こころのケアセンターなごみ/
 メンタルクリニックなごみ 医師)
 栗倉 康之 (大阪府立精神医療センター 事務職)
 安藤 明夫 (中日新聞 新聞記者)

第23回関西アルコール関連問題学会 滋賀大会実行委員名簿 (50音順)

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| 麻生 克郎 (垂水病院) | 安東 毅 (安東医院) |
| 岩田 ころ (小谷クリニック) | 上野 幸子 (滋賀県立精神医療センター) |
| 宇野 千賀子 (滋賀県立精神保健福祉センター) | ※大井 健 (滋賀県立精神医療センター) |
| 太田 裕美 (ひがし布施クリニック) | 大本 淳 (八木植松クリニック) |
| 奥田 由子 (守山こころのクリニック・大津保健所) | 岸田 寿一 (和歌浦病院) |
| 貴村 知子 (新阿武山クリニック) | 小西 亮 (滋賀県立精神医療センター) |
| 坂本 満 (新阿武山病院) | 佐々木啓太 (新生会病院) |
| 佐古 恵利子 (リカバリハウスいちご) | 佐藤 周 (滋賀県立精神医療センター) |
| 繁澤 あゆみ (安東医院) | 杉山 昌儀 (いわくら病院) |
| ※※辻本 士郎 (ひがし布施クリニック) | 殿村 壽敏 (小谷クリニック) |
| 野上 昌代 (滋賀県立精神保健福祉センター) | 波床 将材 (京都市こころの健康増進センター) |
| 濱川 浩 (滋賀県立精神医療センター) | 廣兼 元太 (広兼医院) |
| 松浦 千恵 (安東医院) | 松村 文香 (リカバリハウスいちご) |
| 山本 哲也 (小谷クリニック) | 和気 浩三 (新生会病院) |
| 渡辺 孝弘 (新生会病院) | <※ 関西アルコール関連問題学会 滋賀大会長 ※※ 学会長> |